



愛隣幼稚園.....

# 園だより

.....17. 5月号

## おとなが問題？！

「家に帰ったらぐっすりお昼寝です！」たんぼぼ組のお母さんが言っていました。盛大に泣いていた子どもたちの声も、随分小さくなってきました。晴れている日が多かったので、園庭でいっぱい遊ぶことができました。寂しい気持ちが紛れて楽しそうなことに目が向きます。先生や仲間と遊び始めると緊張も少しずつ解けて、笑顔も見えるようになりました。でも帰りの集まりでちゃーんと座しているところを見ると、まだまだ安心して本領発揮というところまでは行かないようです。(例年、最初はよそ行きの顔をしてきているので、お行儀のいい集まりをしていますが、長くは続かないはずです。)それでも夏本番の頃には、ひとり一人その子らしさを見せてくれていると期待しています。そんな春のエピソードから5月の園だよりをお届けします。

門での「おはよう」の時間が終わり、園庭から事務室へ向かおうとしていた私は、熱い視線を感じて振り向きしました。たんぼぼの子が2人、何をするでもなく立っています。振り向いた私に彼らからの言葉はありません。そんなに困った顔でもないのですが、何かを待っているようなそんな雰囲気は伝わってきました。なんだろう・・・？ちょっと考え、こんな声を掛けてみました。「シャベル持って、砂場で遊んでもいいんだよ。」すると、2人はニコッと笑って動き出しました。“遊ぶ”ためには、自分で考え、決めて動き出すということも大事なことです。たんぼぼ組の初めには少し難しいことです。でも、言い過ぎれば次も次も大人の言葉を待ってしまうでしょう。どこまで、どれくらいということが大人にも難しいのです。

実のならないどんぐりの木の下には、あいりん山があります。子どもたちは坂道が好きです。登っては下り、トトトトって駆け下りるのもちょっとスリルがあって愉快です。ところが、あいりん山の隣にはブランコがあるので、もちろんブランコを漕いでいる子どもたちもいるわけで、駆け下りる方向を誤れば怪我をすることになります。それで子どもたちには声を掛けます。山を駆け下りている子どもたちにも、ブランコを漕いでいる子どもたちにも。そして、プランターも置いてみたりしています。初めての幼稚園にはやってみたいことがたくさんあって、同じくらい危ないことも転がっています。経験の少ない子どもたちには判断のつかないこともあるので、見守る中にも大人の声かけや配慮はどうしたって必要です。そうするうちにやがて自ら判断して行動出来る人になっていくからです。

遊びたい物が重なって、取り合いになる姿も見かけます。言葉にすることが難しいので手が出ます。涙が出ます。今年の子どもたちにはまだ見かけませんが、戦いごっこも始めのうちは面白いのですが、だんだん本気になって止められなくなり、同じように最後には涙が出て痛い思いをします。終わりにしたくても自分の気持ちを言い表すことが難しく、相手の気持ちを聞くことも出来ません。保育者は見守りつつ、大人として声を掛け仲間の関係を繋いでいくために介入します。言葉に出来ない気持ちを代弁し、嫌なこと痛いことにならないための提案もします。困った時の手立てを子どもたちはまだ知らないからです。

愛隣幼稚園は子どもたちの自由で主体的なあそびを中心にした園生活をしたいと願っています。ただ自由であることも、主体的であるということも、誰にでも生来備わっているものではないような気がします。子どもをただ見守りながまま任せても自由で主体的な人にはなれません。自分勝手ではなく自由であること、自ら考え関わり仲間と生活するということには、保育者はもちろんのこと子どもを取り巻く大人たちの関わりが重要なのです。モデルとなる大人、提案し伝える大人、尊重し信頼し見守る大人、受容し肯定する大人・・・いつ、どんなタイミングで、どんな大人として子どもに関わっていったらいいのでしょうか。簡単ではありませんね。決まったマニュアルもありません。出来ることは、子どもを知ろうとすること、真摯に向き合おうとすることでしょうか。すると、今子どもに必要なことが見えてくると私は考えています。